

# 豪雪地域における「スノープライド」を軸としたまちづくり

—新潟県津南町を事例として—

北九州市立大学 法学部政策科学科 檜原ゼミナール (担当教員: 檜原真二)

代表者: 金子賢樹

発表者: 小林里佳 本田敬

参加者: 垣屋宗寿 河内裕司 栗原万誉 小林謙介 小林里佳 田中順

徳永大地 濱田修吾 本田敬

越智健 黒木雄貴 清水佑紀 登倉慎太郎 西川恵理 益満幸香 江草雅恵

はじめに

第1章 津南町の概要

第2章 津南町の課題

1. 調査の概要
2. 聞き取り調査から見えたもの
3. 津南町の問題と提案の方向性

第3章 まちを魅せるまちづくり

おわりに

## 梗概

豪雪地域において、住民は、雪に対してマイナスイメージ持ち、特に除雪作業をすることで、雪をやっかいものと捉えている。しかし、雪は本当にやっかいものだろうか。豪雪地域には他にはない、「雪」という重要な資源が存在すると考えるべきではないのか。人々は雪の恩恵に感謝し、誇りを持つべきだろう。

さて、シビックプライドという言葉をご存じであろうか。これは「都市に対する市民の誇り」であり、「都市をより良い場所にするために自分自身がかかわっている」という当事者意識を伴う自負心のことだ。津南町をはじめとする豪雪地域では、まちと恩恵をもたらす雪に対して誇りに思うべきだ。ここで我々は、「豪雪地域におけるまちと雪に対する住民の誇り」をスノープライドと呼ぶことにした。

本研究においては、豪雪地域の問題と雪に対する住民の意識の関係を明らかにするため、計 179 名に聞き取り調査を実施した。そこから、人口減少、特に若年層の流出が最大の問題であることが明らかになった。人口減少の原因の 1 つとして、住民のまちに対する誇りの欠如があるのではなかろうか。聞き取り調査によると、I ターン者はまちの魅力に気づいている人が多かった。雪をはじめとした自然の豊かさ、景色、良質な水などを挙げていた。一方、地元の住民はまちの魅力に気づいていないことが多かった。なかでも大人は、特にまちの魅力を理解していないことが多い。そこで、スノープライドの醸成とともに観光業の充実を図り、人口減少問題を解決するための提案をする。また津南町は、教育と観光の両方の要素を持つジオパークを有す。我々は、ジオパークを活かす子どもによるガイド、住民と観光客の交流拠点、芸術のまちを魅せる宿を提案する。

以上のような提案により、子どもは進学などで転出して帰ってくる可能性が高まり、まちに住み続けたいと思う住民が増加するだろう。さらに、まちに魅せられた観光客は I

ターン者となるだろう。今回のテーマである「みんな雪のおかげ」で問題を解決することにつながるのだ。

はじめに

「雪地獄 父祖の地なれば 住み継げり」。上村憲司津南町長が我々との懇談会<sup>1</sup>の場で紹介された句である。戦前の、雪によって起きた大きな事故での犠牲者を悼んで詠まれた句であるという。この句からわかるように、豪雪地域において雪はマイナスイメージで捉えられている。しかし、雪は本当に負の要素でしかないのだろうか。今回のテーマが「みんな雪のおかげ」であるように、豪雪地域には雪の恩恵を受けているものが多く存在する。

豪雪地域での雪の恩恵として最も大きいものは、水である。雪解け水は硬度が低く、口当たりが柔らかい。そのため、水道水であっても飲みやすい。また、冬場に降った雪は夏にかけて徐々に溶けるため、下流に流れる水の量を一定に保つ（一般社団法人雪国観光圏 2016：5）。雪が天然のダムのような役割を果たすことで年間を通して水が豊富である。豪雪地域はいわば、水源の里<sup>2</sup>なのである。降雨量に左右されない豊富な水量を活かし、水力発電が行われている地域もある。さらに、雪解け水を使って育てられた米や野菜は大変美味である。コシヒカリはもちろん雪下ニンジンや山菜などがその代表だろう。そして、雪によって作られる景色は豪雪地域にしかない美しい色合いを醸し出す。一面銀世界のモノトーンな景色は見る者を魅了する。このように、雪の恩恵を受けている豪雪地域にとって、雪はまさに形を変えた資源である。豪雪地域の人々は、これらの雪の恩恵について誇りを持つべきだろう。

シビックプライドという言葉がある。これは、一般的に「都市に対する市民の誇り」であり、「都市をより良い場所にするために自分自身がかかわっている」というある種の当事者意識を伴う自負心のことである（シビックプライド研究会 2015：126）。欧米などでは、自分の住むまちに対する誇りとして形のある建造物を挙げることが多い。一方で豪雪地域では、まちに対する誇りだけでなく、形を変えて様々な恩恵をもたらす雪に対しても誇りを持つべきではないだろうか。「豪雪地域におけるまちと雪に対する住民の誇り」、そのようなものを我々は「スノープライド」と呼びたい。本稿では、雪に対してマイナスイメージを持つ住民にスノープライドを育み、問題解決へと向けた提案をする。住民がまちと雪に対して誇りを持つことが、豪雪地域の問題を解決する鍵となるのではないだろうか。

なお、本稿の構成は以下の通りである。まず、第1章では津南町の概要について述べたい。続いて第2章では我々が行った調査結果について述べ、津南町の問題について考える。最後に第3章では問題を解決するための政策を提案したい。

## 第1章 津南町の概要

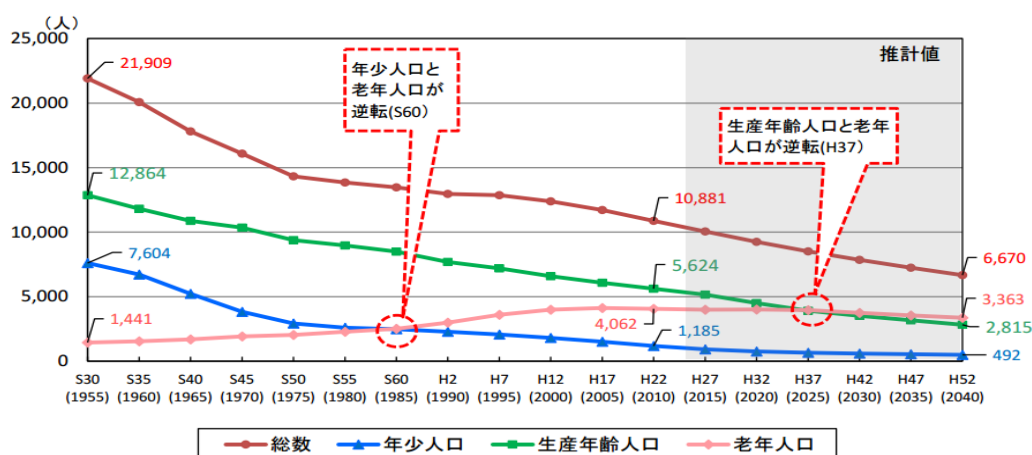
今回のテーマは「みんな雪のおかげ」である。このテーマを考えるにあたり、最大積雪量が3メートルを超える<sup>3</sup>、まさに豪雪地域である新潟県中魚沼郡津南町を研究対象地として選択した。

津南町は新潟県の最南端にあつて、長野県との県境に位置している。町内を流れる4つの河川によって、雄大な河岸段丘<sup>4</sup>が形成されている。冬期間が長く、日本有数の豪雪地域

である一方、夏は北西の涼風に恵まれ、高原のようなさわやかな気候が続く。町一帯は、河岸段丘を利用して先史時代より人々が生活を営み文化を築いてきたことが伺われ、町の各地に縄文時代の遺跡が見受けられる（津南町ホームページ）。

津南町の人口は、合併により町が誕生した 1955 年の 21,909 人をピークに減少し続けており、現在では 10,133 人、高齢化率は 38.2% である（津南町 2016a : 1）。これを年齢層の 3 区分別に見てみよう。年少人口と生産年齢人口は町の総人口の減少と共に一貫して減少している一方、老年人口は 1955 年から 2005 年にかけて一貫して増加していた。しかし、2005 年の 4,066 人をピークに老年人口は若干の減少を始めており、これは増田等が言う『『老年人口維持・微減+生産・年少人口減少』の『第 2 段階』』（増田 2014 : 16）に該当するだろう。国立社会保障・人口問題研究所の試算では、2040 年には津南町の人口は 6,670 人まで減少するとされている（図 1）。

図 1：人口総数・年齢 3 区分別人口の推移



出典：津南町「津南町まちひとしごと総合戦略人口ビジョン」、1 頁

また、町の基幹産業は農業であり、「魚沼コシヒカリ」に代表される稲作、ニンジン・アスパラガス・花卉・葉たばこ等の畑作のほか酪農とキノコ等の特養林産物の産地として知られている（全国町村会ホームページ）。

さらに、特筆すべき点として、2014 年に隣村の長野県栄村にまたがる苗場山麓一帯が日本ジオパーク<sup>5</sup>に認定されたことが挙げられる。ジオパーク内にある秋山郷は秘境として知られ、観光スポットとなっている。さらに、毎年 3 月に開催される雪まつりには津南町内外から多くの観光客が来町し、2015 年には約 12,000 人が訪れた。雪まつりでは、スノーボードのジャンプ大会が開かれたり、2,000 個<sup>6</sup>のスカイランタンが打ち上げられたりと、様々なイベントが開催される。

夏にはおよそ 4 ヘクタールの畑に約 50 万本<sup>7</sup>のひまわりが咲く、津南ひまわり広場がオープンする。畑のなかは迷路になっており散策できる他、結婚式も開かれるなど、毎年約 7 万人<sup>8</sup>が訪れる大きなイベントとなっている。

## 第 2 章 津南町の課題

### 1. 調査の概要

まず我々は、豪雪地域の問題と雪に対する住民の意識の関係を明らかにすることを目指

した。そこで、問題の因果関係を深く探ることができる質的調査を中心に研究を進めることにした。

今回のテーマが「みんな雪のおかげ」ということもあり、豪雪地域の雪の状況について把握するため2016年3月21日から24日の4日間津南町を訪問し、津南町役場職員3名、津南町教育委員会ジオパーク推進室代表他1名など合計7名<sup>9</sup>に対して聞き取り調査を行った。

その後、2016年8月7日から18日の12日間で町長をはじめ合計172名<sup>10</sup>に調査を行った。まず、津南町の自然を生かした郷土教育について津南町教育委員会ジオパーク推進室代表、町教育委員会代表他1名、県立津南中等教育学校代表及び生徒21名、NPO法人関係者3名にそれぞれ聞き取り調査を行った。次に、津南町の観光業の現状について秋山郷で観光業を営む住民1名と宿泊施設を営むNPO法人代表他1名に聞き取り調査を行った。また、住民の雪に対する認識を把握するため津南町役場前及びその周辺を通行した津南町在住の住民117名への街頭インタビューを行った。さらに、外部からみた津南町の魅力を把握するためUターン者12名、Iターン者10名にそれぞれ聞き取り調査を行った。

## 2. 津南町視察から見えたもの

我々が聞き取り調査を行うなかで、あるIターン者から興味深い発言を得ることができた。それは、「地元の人が地元の魅力について理解していない」（2016年8月16日）というものだった。調査を行っていくなかで見えてきたのは、Iターン者からはまちの魅力についてはよく話題になるが、地元住民からはあまり話題にならない、という傾向であった。

Iターン者が指摘するまちの魅力としては、まちの景色や自然の豊かさ、水の美味しさなど、多くは雪の恩恵を受けた自然についてであった。自然の景色に感動し、それがきっかけで移住を決めたIターン者さえいた。一方で、地元住民に対する聞き取り調査のなかでは、とにかく雪かきが大変であり、雪の恩恵としてはスキーができることや、農業用水に困らない程度しか把握していないという傾向が強かった。しかしながら、秋山郷で宿泊業を営む住民からは「これまでまちに対しては雪が多いなどマイナスイメージしか持っていなかったが、苗場山麓がジオパークに認定されたことで、観光客からの質問に答えるために大学教授や研究者の講演を聞きに行くようになった。そこで津南の大地が形成された過程や太古から降っていた雪の話などを聞いて、素晴らしいところに住んでいるのだという認識が変わった」（2016年8月17日）という話を得ることができた。

一連の調査をまとめると、以下のようなになるであろう。Iターン者は津南町の魅力についてよく気づいている一方、地元住民はそれほど気づいていない傾向にあった。しかし、観光業に携わる人の中には観光客と接する中で地元の魅力に気づいた地元住民がいた。

## 3. 津南町の問題と提案の方向性

津南町は1955年に合併により誕生して以降、一貫して人口が減少している。前述の「増田レポート」では消滅可能性都市<sup>11</sup>に指定されており、国立社会保障・人口問題研究所の予測によると、このままでは2025年には生産年齢人口が3,900人、老年人口が3,955人となり、生産年齢人口と老年人口が逆転する(図1参照)。自然減と社会減を合わせて毎年

約 150 人～200 人の人口が減少しており（津南町 2016b：10）、人口減少は津南町にとって喫緊の課題である。

人口ピラミッドを見てみよう（図 2 参照）。50 代以上の人口と比較して 20～40 代の人口が少ない。人口の再生産や税収の観点からこの世代の人口減少は問題である。さらに細かく見ていくと、20～24 歳の人口の減少が目立つ。15～19 歳の人口と比較して、減少幅が大きい。20 代前半<sup>12</sup>の地元の若者が流出しているのである。

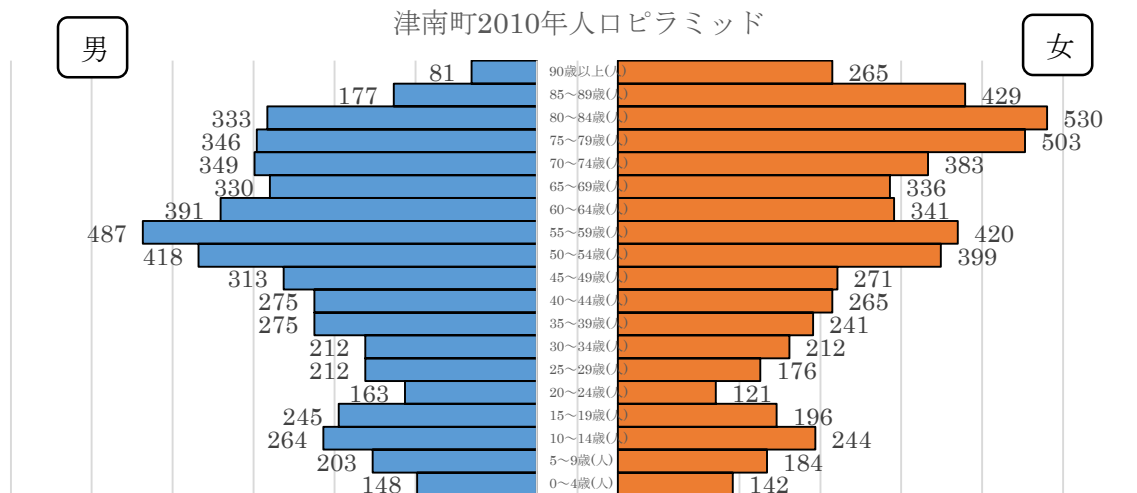


図 2: 津南町人口ピラミッド 平成 22 年国勢調査を基に檜原ゼミ作成

これには 3 つの理由があると考えられる。第 1 に、津南町に高等教育機関が無いことである。津南町出身の高校生の多くは、県立津南中等教育学校もしくは隣町の県立十日町高校等を卒業後、就職するか進学するかの 2 択を迫られる。ここで進学を希望する場合、津南町内には大学も専門学校も無いため、学生は必然的に町から出ていかざるを得ない。

第 2 に、仕事が無いためである。津南町の 20～24 歳の人口の転出理由は、60%以上が就職である（津南町 2016b：18）。新潟県の調査では、転出者の 50%以上が関東地域へと転出している（新潟県総務管理部統計課 2016：6）。

第 3 の理由として、住民のまちに対する誇りの欠如が考えられないだろうか。前節でも述べたように、住民がまちの魅力をあまり知らない。なかでもその傾向が強いのは大人であろう。地元住民に対する聞き取り調査でも、まちの魅力について知らない人の多くは大人であった。大人が子どもに対して、将来まちに帰って来なくても良いと吹き込んでいる構図があるのではないだろうか。まちに対して誇りを持たないまま転出した若者が、再びまちに戻って来ないのは当然のことである。

高齢化をはじめ津南町には様々な問題があるが、今回我々が問題として取り上げるのは人口減少である。その中でも特に、20 代前半<sup>13</sup>の若年層が流出していることが最も大きな問題であるとする。この問題の原因は上記のように 3 点ある。その中で我々が解決を試みるのはまちに仕事が無いこととまちの魅力に対する認識不足・誇りの欠如である。高等教育機関が無いことについては、進学先の選択は学生本人の自由であることや新たな設立は現実的に困難であることなどから問題として取り扱わない。むしろ、進学で転出した学生が津南町に仕事が無いことや誇りを持っていないことで、まちへ戻るができないこ

と、あるいはまちへ戻って来たくないと思うことのほうが問題ではないだろうか。

津南町の人口減少を解決するためには、まず住民にスノープライドを醸成することが必要であると考えます。スノープライドがあれば、大学進学を機に転出した若者が帰り、また、まちに住み続けたいという住民が増えるだろう。聞き取り調査により、豊かな自然などの津南町の魅力に気づいていない住民が多いことが分かった。住民のスノープライドを醸成するには、まちの自然を活かした観光業の充実が最適である。なぜなら津南町の豊かな自然などの魅力を、観光客に紹介することで住民はまちの魅力に触れるからだ。そうすることで、住民がまちに対して誇りを持てるようになる。また、観光業の充実を図ることでまちに雇用が生まれ、Uターン者の働き口となる。さらに、観光を通してまちに魅せられた観光客が将来的にはIターン者として転入してくるだろう。そのようにして、観光—交流—一定住の流れを作り出し、津南町の人口を維持することができるのではないだろうか。

### 第3章 まちを魅せるまちづくり

津南町は第1章でも説明したように日本ジオパークに認定されており、自然豊かな観光地を多く有している。それぞれの観光地は四季によって異なる顔を見せる。春は中子の桜、夏はひまわり広場、秋は紅葉の秋山郷、冬はマウンテンパークから見える白銀の河岸段丘（図3参照）。それらを自然が造り出した芸術作品として見立てると、津南町はまち全体が自然の美術館なのである。そのため、本章では以下のような3つの提案をする。



図3：津南町の主な観光地（Googleに基づいて檜原ゼミ作成）

#### 1. なじょっこ案内人

第1に、「なじょっこ案内人」を提案する。「なじょっこ案内人」とは、津南町の小・中

学生が苗場山麓ジオパーク内の秋山郷や龍ヶ窪などの観光地を案内する子どものガイドのことであり、教育と観光を融合した新しい試みである。

まず、ガイドを行う上で「なじょっこ案内人」となる子どもは事前学習が必要だろう。現在、津南町の小・中学校では「未来への扉を開くキャリア教育推進事業」の一環で郷土教育が行われている。小学校では、津南町教育委員会が配布している副読本を用いて郷土について学び、また中学校では、「地域調べ」学習を活用し、津南の豊かな自然や文化について学ぶ。これらの郷土教育により、子どもはガイドに必要な知識を得ることができるだろう。さらに、知識の定着をはかる意味でも、学校のカリキュラムの中で発表の練習を行う。

そして本番である。観光地にて観光客を相手に説明をする。その際、子どもだけでは説明が不十分な点もあると予想されるため、観光ガイドの経験のある大人がサポートにつくと良いだろう。

「なじょっこ案内人」を行う狙いは以下の通りである。まず、教育面での狙いとしては、子どもが自分のまちについて学ぶことである。郷土教育で得た知識を基に、実際に観光客に説明することで、子どもはジオパークの自然や文化について深い知識として身につけることができる。そうしてまちの魅力を知れば、自ずとスノープライドが醸成されるだろう。さらに、スノープライドを持つのは子どもだけではない。サポートにつく大人は、子どものガイドに付き添うことで子どもと一緒にまちの魅力を知ることになるのである。

続いて、観光面での狙いとしては、観光客に子どもと観光地をまわることを楽しみつつ、津南町を魅力的に思ってもらうことである。観光地について子どもから説明を受けることは、観光客にとって大変魅力的だろう。子どもならではの視点から津南町の魅力について説明を受ける。そうした観光客は、再び津南町を訪れたいと思うのではないだろうか。

「なじょっこ案内人」の運営主体としては、教育委員会が望ましい。我々の教育委員会職員に対する聞き取り調査で、「子どもがジオパークを中心に津南町の自然や文化に触れることで、誇りを育てることができる。まちを語ることができる人材を育てていきたい」という回答があった。津南町の教育現場で働く人も我々の考えと同様、子どもたちにまちへの誇りを育成しようとしていると考えられる。教育と同時に子どもがまちの観光をサポートすることで、そのような人材育成の促進につながるはずだ。

「なじょっこ案内人」を行うことで期待できる効果は以下の通りである。まず、子どもがスノープライドを持つことで、大学進学などでまちを離れても再び戻ってくるきっかけとなる。また、大人にもスノープライドを醸成することで、子どもに将来まちに戻ってきて欲しいと思うようになるだろう。さらに、案内人の説明を受けた観光客はまちを魅力的に思う。そうしてまちに魅せられた観光客のなかには、定住を考える人もいるのではないだろうか。

## 2. 交流の<sup>やがた</sup>館つなん

現在、津南町には観光客と住民の交流の場が少ない。また、役場前に設置されている観光案内所も手狭でスタッフも少なく、観光の拠点として十分に機能しているとは言えないだろう。今後、自然の芸術作品を生かし、観光業の充実が必要な津南には観光客と住民の



交流の拠点<sup>やかた</sup>を設けるべきではないだろうか。そこで、第2の提案は「交流の館<sup>やかた</sup>つなん」である。

「交流の館<sup>やかた</sup>つなん」は、津南観光物産館に新たに併設する形をとる。津南観光物産館は、秋山郷や龍ヶ窪などの各観光地の中心に位置するため、拠点としてふさわしいのではないだろうか。

「交流の館<sup>やかた</sup>つなん」には3つの機能を持たせたい。1つ目は、休憩と交流機能である。現在、町内には、喫茶店やカフェなどの気軽に立ち寄れて足を休める場所がない。そこで、施設内にカフェを設置する。カフェには足湯を設けくつろぎの場を演出したい。あわせて、カフェでは、ワンコインで飲み物を提供することで気軽に立ち寄りやすくなるのではないか。ここでは住民同士、または住民と観光客の交流が望まれる。

2つ目は、Iターン者と観光客の交流機能である。Iターン者が中心となり、週に数回、移住相談窓口を設ける。窓口では、Iターン者が観光客の質問に答えたり、Iターン者の移住のきっかけなどについて語ってもらう。また、Iターン者からみる津南の魅力についても観光客に語ってもらう。さらに、ここはIターン者と住民の交流の場を兼ねる。

3つ目は、観光のサポート窓口とすることである。先ほど提案した「なじょっこ案内人」の受付もこの施設で行うことにしたい。また、「なじょっこ案内人」によるガイドの始発と終着点も兼ねる。

これらの機能を備えることで以下の効果があると考えられる。まず、住民に対する効果を見ていきたい。

カフェや施設内での会話を通して、住民はまちの魅力について観光客の視点から認識するようになる。さらに、住民は観光客に対してまちの魅力を紹介するようになることが望まれる。このような過程で、住民はスノープライドを育むことができると考える。また、Iターン者は相談役となり「交流の館<sup>やかた</sup>つなん」を訪れることで、住民と話す機会も得ることができる。これにより、Iターン者と住民の距離が縮まり、Iターン者の意見や考えに住民が耳を傾けるようになるのではないか。次に、観光客に対する効果を見てみよう。観光客は、豪雪地域の暮らしについて住民から直接聞くことで、豪雪地域における生活の知恵などの観光地巡りだけでは知り得ない情報を得る事ができる。また、Iターン者との交流を通して、観光客が移住を検討するきっかけになるのではないだろうか。

「交流の館<sup>やかた</sup>つなん」は新たに立ち上げるNPO等が設立から運営まで一貫して行っているかどうか。NPO等の発起人としては、Iターン者が望まれる。Iターン者の中には津南の魅力に惹かれ移住を決めた人もいた。その様な人であれば、津南の観光の拠点となる施設の中心を担ってくれるだろう。最後に、「交流の館<sup>やかた</sup>つなん」をはじめとした観光施設の設立資金はクラウドファンディング<sup>14</sup>を活用することとしたい。

### 3. 「四季の宿」

第3に、「四季の宿」を提案する。運営主体は前述した「交流の館<sup>やかた</sup>つなん」と同じとする。「四季の宿」は、津南の食と風土を堪能することができる宿である。宿の外観に四季折々のデザイン性を持たせ、周りの風景と一体化したものとする。宿のデザインは、広く一般から公募する。



「四季の宿」は、津南町の中心部を囲うように中子地区や赤沢地区、見玉地区、上野地区などに空き家を改修して4店舗開業する。津南町は、春には中子の桜、夏はひまわり広場、秋は山全体が紅葉する秋山郷、冬はマウンテンパークから見る雪化粧した河岸段丘のように、観光名所の魅力を最大限引き出す季節がある。旬の季節ごとに営業場所を変え、基本的に同時期の営業はしない。ただし、雪まつり期間中はすべての宿の営業を行い、より多くの観光客が津南町に滞在できるようにする。この宿では、宿泊しない観光客も利用できるレストランを営む。メニューには、雪解け水により育てられた大変美味である米や野菜を使った、津南町でしか食べることのできない新鮮な料理を提供する。宿やレストランでは、観光客にアンケートを行い、感想を募る。町の広報や「交流の館つなん」でアンケートにより得られた観光客の視点を発信し、津南町住民が周知するきっかけをつくる。

また、レストランで扱う農作物は、就農してから経験の浅い農家から仕入れる。鮮度は高品質であるが、形や大きさが販売規格に合わない農作物を、宿が率先して買い取る仕組みを取り入れる。運営主体である NPO と新規就農者支援をつかさどる農業公社が連携して、円滑な食材の取引を可能とする。

この宿での目的は3つある。第1に雇用の創出、第2に宿不足の改善、第3に芸術のまちつなんを生かし観光振興を図ることだ。

宿やレストランを利用した観光客の感想を津南町住民が認識し、津南町住民が「四季の宿」へ訪れることにもつながる。新たに就農したい人にとっても、「四季の宿」が観光客と住民を巻き込み経営を行うことは、津南町での就農を決めることにつながるのではないだろうか。また、宿泊施設の設立により、従来は日帰りしていた観光客が滞在し、観光客に津南町をより深く実感してもらい、津南町での消費機会が増える。津南町の旬の食材を生かした料理は観光客の印象に残り、味覚が津南を覚える。そして再び津南町の料理を食べたい、再び訪れたいと思ってもらおう。「四季の宿」を介す観光の提案は、観光客に自然が醸し出す芸術的な風景を魅せ、津南町の観光業充実へとつながる。

おわりに

以上の提案により、これまで雪に対してマイナスイメージを持っていた津南町の住民にスノープライドを持たせることができるだろう。スノープライドを持った住民が増えることで、まちへ住み続けたいという住民やUターン者が増える。また、まちの観光業が充実することにより、交流人口が増加する。まちに魅せられた観光客の中からIターン者も増えるだろう。そうしてU・Iターン者が増加することで、津南町の人口減少に歯止めをかけ、人口維持することができるだろう。

これからの豪雪地帯において、人口減少等の問題とスノープライドを関連付けて考えることは、問題解決の1つの方策となる。誇りを持った住民、そしてまちの魅力に魅せられた人がまちづくりを担う時代が到来するのだ。豪雪地域には、雪の恩恵を受けているものが必ずある。豪雪地域の問題は、雪のおかげで解決できるのである。

\*本研究にあたっては、津南町教育委員会ジオパーク推進室長の佐藤雅一様、同室瀧澤美樹様、津南町税務町民課上村栄一様、NPO 法人雪の都 GO 雪共和国小林幸一様をはじめと

する多くの津南町民の皆さまにご協力いただきました。心よりお礼申し上げます。

#### 参考文献

##### a) 著作及び論文等

- 1) 増田寛也 (2014), 『地方消滅 東京一極集中が招く人口急減』中央公論新社
- 2) シビックプライド研究会 (2015), 『シビックプライド 2 国内編—都市と市民のかかわりをデザインする』宣伝会議
- 3) 平野勇 (2008), 『ジオパーク—地質遺産の活用・オンサイトツーリズムによる地域づくり—』オーム社

##### b) 資料

- 1) 一般社団法人雪国観光圏「SNOW COUNTRY FREAK Vol.16」(2016)
- 2) 津南町「住民基本台帳(平成28年8月末)」(2016a)
- 3) 国立社会保障・人口問題研究所「日本の地域別将来推計人口」(平成25年3月推計)
- 4) 津南町「まち・ひと・しごと創生総合戦略津南町人口ビジョン」(2016b)
- 5) 新潟県総務管理部統計課「新潟県の人口移動」(2016)

##### c) 調査記録

- 1) 檜原ゼミ「津南町役場(総務課、地域振興課)に対する聞き取り調査」2016年3月22日～24日
- 2) 檜原ゼミ「津南町商工会事務局長に対する聞き取り調査」2016年3月22日
- 3) 檜原ゼミ「津南町教育委員会ジオパーク推進室長、職員に対する聞き取り調査」2016年3月24日
- 4) 檜原ゼミ「結東地区住民に対する聞き取り調査」2016年3月24日
- 5) 檜原ゼミ「地元商店主に対する聞き取り調査」2016年8月8～9日、15日、18日
- 6) 檜原ゼミ「津南町教育委員会教育長、津南中学校教頭、教育委員会職員に対する聞き取り調査」2016年8月8日
- 7) 檜原ゼミ「NPO法人Tap事務局長に対する聞き取り調査」2016年8月9日
- 8) 檜原ゼミ「認定農業生産法人大地代表に対する聞き取り調査」2016年8月9日
- 9) 檜原ゼミ「津南中等教育学校教頭、同校津南町出身生徒に対する聞き取り調査」2016年8月10日
- 10) 檜原ゼミ「津南町森林組合長に対する聞き取り調査」2016年8月10日
- 11) 檜原ゼミ「NPO法人雪の都GO雪共和国理事長、事務局長に対する聞き取り調査」2016年8月11日
- 12) 檜原ゼミ「津南町役場(地域振興課、福祉保健課)に対する聞き取り調査」2016年8月12日
- 13) 檜原ゼミ「JA津南町営農指導課長に対する聞き取り調査」2016年8月12日
- 14) 檜原ゼミ「津南町教育委員会ジオパーク推進室長に対する聞き取り調査」2016年8月17日

- 15) 檜原ゼミ「結東地区住民に対する聞き取り調査」2016年8月17日
- 16) 檜原ゼミ「津南町地域おこし協力隊に対する聞き取り調査」2016年8月17日
- 17) 檜原ゼミ「NPO 法人越後妻有里山協働機構かたくりの宿職員に対する聞き取り調査」  
2016年8月17日～18日
- 18) 檜原ゼミ「津南町長との懇談会」2016年8月18日
- 19) 檜原ゼミ「津南町在住農家に対する聞き取り調査」2016年8月12日、16～18日
- 20) 檜原ゼミ「津南町住民に対する聞き取り調査」2016年8月8～10日、12～13日、15日

d) ホームページ

- 1) 津南町ホームページ (<http://www.town.tsunan.niigata.jp/>) 2016年9月5日閲覧
- 2) 全国町村会ホームページ (<http://www.zck.or.jp/>) 2016年9月5日閲覧

- 
- 1 2016年8月18日、上村憲司津南町長と檜原ゼミとの懇談会。
  - 2 水源地域に位置する過疎や高齢化の進行により、地域活動の維持が困難な状況に直面している集落や市町村。京都府綾部市などが代表である。
  - 3 津南町ホームページ。
  - 4 河川が長い年月をかけて川岸を少しずつ変えながら、川底を下方に削っていったために出来たもの（津南町観光協会公式サイト）。
  - 5 「地球・大地（ジオ:Geo）と、「公園（パーク:Park）」とを組み合わせた言葉で、「大地の公園」を意味し、地球（ジオ）を学び、丸ごと楽しむことができる場所（日本ジオパークネットワーク）。
  - 6 つなん雪まつりホームページ。
  - 7 津南町観光情報つなんめぐり。
  - 8 津南町観光協会公式ホームページ「津南彩発見」。
  - 9 津南町役場職員3名、津南町教育委員会ジオパーク推進室代表他1名、津南町商工会代表、秋山郷住民の合計7名。
  - 10 津南町長、津南町役場職員3名、津南町教育委員会ジオパーク推進室代表、津南町教育委員会代表他1名、町立津南中学校代表、県立津南中等教育学校代表、同校生徒21名、NPO 法人 Tap 代表、NPO 法人 GO 雪共和国代表他1名、NPO 法人越後妻有里山協働機構かたくりの宿代表他1名、地元商店主4名、JA 津南町代表、津南町森林組合代表他4名、秋山郷住民3名、地域おこし協力隊1名、農家6名、農業生産法人代表の合計55名及び津南町役場前及び国道117号線沿いの商店、津南町役場前バス停にて津南町在住の住民117名の合計172名。
  - 11 若年女性人口の減少率が5割を超える自治体（増田2014：208頁）。
  - 12 ただし実際には18歳以降からの転出が著しい。今回使用した人口ピラミッドは5歳刻みであるため、このような記述とした。
  - 13 脚注12に同じ。
  - 14 新規・成長企業等と資金提供者をインターネット経由で結びつけ、多数の資金提供者（=crowd[群衆]）から少額ずつ資金を集める仕組み。（内閣府）